

## 平成22年度

# アジア情報研修「中国関連情報の調べ方」を受講して

白 髪 友 賀

### はじめに

平成22年11月17日(休)に国立国会図書館主催「平成22年度アジア情報研修—中国関連情報の調べ方—」を受講することができた。

この研修はアジアの情報資源に関する知識の習得やレファレンス能力の向上などを目的として、国立国会図書館関西館アジア情報室が開設された平成14年度から行われている。

今回のテーマは「中国関連情報の調べ方」ということで、中国資料に関してのみを集中的に学んだ。過去には今回のようにひとつの国(インド、韓国など)に焦点があてられたときもあれば、幅広い地域(東南アジア、イスラーム諸国など)が採り上げられたときもあり、テーマとなる国や地域は毎年度異なっている<sup>(1)</sup>。

本稿では、このたび受講したアジア情報研修についての報告を行いたい。レファレンス業務を含め、図書館業務について未熟な筆者が、本研修の魅力をお伝えできるか不安なところではあるが、中国関連情報を参考調査する際の一助となれば幸いである。

### アジア情報室

研修内容を報告するまえに、アジア情報室について述べておきたい。

現在、国立国会図書館関西館にあるアジア情報室だが、変遷をたどれば歴史は古く、1948年(昭和23年)国立国会図書館創設時に開設された「中国資料閲覧室」に源流をみることができる。名称の変遷および設置年は以下の通りである。

1948(昭和23)年	中国資料閲覧室
1955(昭和30)年	アジア資料閲覧室
1959(昭和34)年	アジア資料参考室
1961(昭和36)年	アジア・アフリカ資料室
1986(昭和61)年	アジア資料室(東京本館)

2002(平成14)年 アジア情報室(関西館)

現在のアジア情報室では、資料収集の対象地域が明確に決められている。また、対象地域資料についての選書、目録作成、保管、利用などすべての業務は一貫して、ひとつの課(アジア情報課)で行われている。このような枠組みは、1986年のアジア資料室設置時につくられたもので、当時のノウハウがさまざまな形で今に受け継がれているとのことである<sup>(2)</sup>。

### 研修内容報告

研修プログラムは「中国関係資料の調べ方概論」「中国の統計情報の調べ方」「中国の人物情報の調べ方」の3本立てとなっており、いずれも、講義、実習、解説の順で行われた。演習時間が十分にとれないことへの配慮から、実習問題は事前に配布されていたので、レファレンス初心者の筆者でも余裕をもって取り組むことができた。

3つの講義を通じて非常にたくさんのレファレンスツールが紹介されたのだが、数が多すぎるので、レファレンスツールごとの具体的な説明は割愛させていただくこととする。なお、講義資料および実習問題、解説、資料リストなどは、国立国会図書館ウェブサイトに公開されているので、そちらを参照願いたい<sup>(3)</sup>。

#### 1. 中国関係資料の調べ方概論

講義の冒頭において、「この研修における中国関係資料とは、主に中華民国期以降のものをさす」という定義づけがなされた。つまり、漢籍は扱わないということである。半年前まで漢籍という言葉さえ知らなかった筆者としては、漢籍というひとつの資料種別が存在し、中国関係資料とは何であるかをひとことでは論じきれないあたりに、日本が中国から受けた影響の大きさや歴史の重み、図書館資料の奥

深さを感じた次第である。

### (1) 関西館所蔵の中国語資料について

概論ではまず、国立国会図書館所蔵の中国語資料について説明を受けた。

国立国会図書館における中国語資料の配置はつぎのとおりである<sup>(4)</sup>。

資料種別		所蔵館
漢籍（1911年以前）		東京本館
中華民国期 （1912年） 以降の 中国図書	議会・法令資料	
	1985年までに受入・整理した資料	
1986年以降に受入・整理した資料		関西館
雑誌・新聞		国際子ども図書館
児童書		

関西館には約25万冊の中国図書が収蔵されており、そのうち約17万冊もの大部分を占めるのが、上海新華書店旧蔵書の見本本コレクションである。このコレクションは1930年代から1990年代にかけての中国諸地域の代表的出版物を数多く含んでおり、出版物の一大見本コレクションとして、当時の出版状況を知ることのできる貴重な資料となっている<sup>(5)</sup>。

雑誌は、学術誌を中心に約4,000タイトルを所蔵。うち約1,800タイトルは継続的に受入されている。新聞は、全国紙・地方紙あわせて約360紙収められており、うち約100紙は継続的に受入されているとのことであった。

### (2) 検索時の注意

国立国会図書館にはこれら数多くの中国語資料があるわけだが、資料検索時には注意が必要である。

中国語資料を検索する際に、まず用いるべきはアジア言語 OPAC で、雑誌、新聞および1986年以降に受入された図書については、これで調べることができる。1981年以前に受入されたものは、NDL-OPAC 漢籍目録を使用。1981年～1985年に受入された図書に関しては、カード目録しかなく、OPAC で検索することができない。データ遡及の予定もないそうである。このように、受入された年によって検索ツールが異なることを頭に入れておかなければならない。NDL-OPAC とアジア言語 OPAC では、収録対象資料がまったく異なっているので、受入時

期が分からない場合は両方の OPAC で検索する必要がある。

ちなみに、中国語と朝鮮語以外のアジア言語で書かれた雑誌および新聞を検索したい場合は、アジア言語 OPAC ではなく NDL-OPAC を使わなければならない。資料種別や受入時期がはっきりしない場合は、各言語の検索ツールを順番に試していく必要があるとのことである<sup>(6)</sup>。

### (3) 国立国会図書館サーチ・開発版

ここまで読んで、「なんとややこしいのだろう。OPAC を正しく使い分ける自信がない」と思われた方に朗報をお届けしたい。

2012年1月にアジア言語 OPAC は、NDL-OPAC に統合される予定である。統合後は OPAC を選択する手間が省け、検索が容易になるだろう。

現在、「国立国会図書館サーチ・開発版」というものがウェブ上で公開されている。開発版のため現時点では検索機能や結果表示に不完全な部分があるものの、NDL-OPAC やアジア言語 OPAC を含む複数のデータベースを横断検索することが可能である。また、検索窓には日本語を中国語に翻訳する機能も備えており、中国語のピンイン入力を必要としないことも大きな特長といえる。

### (4) 国外機関の所蔵検索

国外機関の所蔵検索ツールとして、中国国家図書館、上海図書館、台湾国家図書館の OPAC などが紹介された。日本漢字でも検索できる OPAC が多く、郵送複写サービスについてなど、ウェブサイトには日本語のページが多数設けられているため使いやすい。

### (5) 中国関係の雑誌・新聞の調べ方

最近ではオンラインで本文まで閲覧できる雑誌論文が多く、科学技術分野を中心にオープンアクセスジャーナルも増えてきているとのことである。新聞についても新聞社のウェブサイトなどで紙面を閲覧できる場合があるため、所蔵調査にあたる時は、ウェブ上での取得可否を必ず確認する必要があるだろう。

また、このようにオンライン化が進む一方、古い年代の資料は依然として OPAC に掲載されていないことも多いので、冊子目録での検索も怠ってはならないとのことであった。

## 2. 中国の統計情報の調べ方

統計は大きく、政府統計と民間統計の2種類に分けることができる。政府統計は、大規模な調査が多く、種類も豊富である。また、客観的な数値の把握や時系列での調査が可能であり、なにより信頼性が高い。一方、民間統計は、政府統計では取り上げられていない分野もカバーしており、ビジネスに関する統計を調査する際に適している。ただし、民間統計は、会員限定に公開されているウェブサイトなど、入手が難しいものもあるとのことである。

### (1) 政府統計

#### • 中華人民共和国国家統計局

国務院の直属組織であり、統計業務を取り扱っている。対象とする主な統計業務は以下の通りである。

人口センサス：日本の国勢調査にあたる人口の全数調査

農業センサス：農業や農地などに関する統計調査

経済センサス：企業などの就業人数、財務状況などに関する統計調査

経常調査：(調査の対象)人口・労働、農業・農村、工業・運輸業、建設業、卸売業・小売業・飲食、科学技術、世帯調査、価格統計、基本単位および企業

国民経済計算：国内総生産、産業連関表、資金循環表、国際収支表、貸借対照表

#### • 各省庁の統計部門

国家統計局のみならず、各省庁の統計部門でもさまざまな統計調査が行われている。省庁の統計もウェブサイトを確認できるのだが、刊行される統計年鑑などのほうが詳細な情報を得られるとのことであった。

#### • 地方の統計局

4の直轄市、22の省、5の自治区すべての地域において統計年鑑が発行されている。国家統計局ウェブサイトには地方統計局へのリンクが張られており、それぞれのウェブサイトでも統計情報が提供されているので、地方都市についてなど地域に関するより詳細な統計を知りたいときは地域ごとの統計を調べるのがよいとのことである。

### (2) 民間統計

民間統計には、調査会社による調査統計や各種業界団体による業務統計などが挙げられる。総合統計の参考資料として以下のものが紹介された。すべて日本語表記で使いやすいものとなっている。

- 『中国マーケティングデータ総覧』(日本能率協会総合研究所)
- 『中国データ・ファイル』(日本貿易振興機構)
- 『中国情報ハンドブック』(21世紀中国総研編・蒼蒼社発行)

### (3) その他

調べたい項目がどの統計に含まれているのかを知るためのツールとしては、国立国会図書館が提供している『リサーチ・ナビ』、全国の図書館で協同構築している『レファレンス協同データベース』、日本貿易振興機構(ジェトロ)のウェブサイト『アジア経済研究所図書館』などが紹介された。

実習問題のなかでも、統計情報を調べるのは特に難しいと感じた。使用すべきレファレンスツールや検索語があらかじめ示されているにもかかわらず、欲しい情報になかなかとりつけず苦労した。やはり言葉の壁は厚い。日本語のウェブサイトでも、いろんな項目をクリックし続けてようやくお目当ての情報を探し当てたという経験も少なくないのに、中国語のウェブサイトにおいては言わずもがなである。また、日本語に翻訳したとしても「統計データ」「統計規格」「統計制度」「統計分析」など似たような項目が並んでおり、どれを参照すればいいのか、不勉強な筆者は大いに戸惑ってしまった次第である。

## 3. 中国の人物情報の調べ方

人物情報を調べる手がかりとしては、名前(本名、別名、雅称、ペンネームなど)、生没年、出身地、学歴、官歴、著作などが挙げられる。より詳細な情報を得たければ、伝記資料の所在にあたることなども有効である。

データベースだけでなく、冊子体の目録や辞典類もたくさん紹介されたのだが、こちらのほうが日本語で書かれたものが多く、簡潔にまとめられた情報にたどり着きやすいため便利だと感じた。ただ、冊子体は種類も多彩で、ひくのにコツがいるものも多い。冊子体のレファレンス資料は、専門的であるがゆえ用途が限定されるので、調べる対象に応じたき

め細やかな資料の選定、使い分けが必要とされる。紙でできた数多のレファレンスブックを使いこなす能力は、ウェブ上で情報を取得する能力よりも身につけるのに時間がかかると思うが、だからこそ地道に磨いていく必要があると実感した。

## 関西館見学

講義とあわせて、会場である国立国会図書館関西館のアジア情報室と書庫の見学会が行われた。アジア情報室と総合閲覧室は区切りなく配置されているため、関西館地下1階には2つが一体となった広大な閲覧室がひろがっている<sup>(7)</sup>。

白を基調とした閲覧室は清潔な印象で、整然と配置された木製の書架が重厚感を演出していた。書架には、中国、韓国のレファレンス資料を中心に、アジア諸地域、果てはアフリカ諸国の資料までもが所狭しと並べられている。書庫資料の請求方法について尋ねたところ、NDL-OPACで検索できるものはオンラインで請求できるのだが、アジア言語 OPACで検索する資料に関しては、必要事項を所定用紙に書き込んで請求してもらう昔ながらのやり方で出納しているとのことだった。

書庫もとにかく広い。書架に近づくと自動的に周辺の電気がつくようになっていた。夥多な書架を眺めていると、電気をつけたり切ったりすることの苦勞が容易に想起される。これほどの収容力をもってしても、あと数年で書架が埋まってしまうとのことであるから、規模こそ違うものの書庫の狭隘化は図書館共通の悩みであるようだ。受入した雑誌や新聞は基本的にすべて製本することになっているのだが、予算の問題で製本できていない資料も少なくないとのことである。製本新聞の書架は、本を寝かせた状態で保管するような構造になっていた。立てた状態で並べている本学の製本新聞のなかには、大ききゆえにたわんでいるものも多いので、寝かせるかたちの書架のほうが、本にかかるストレスは圧倒的に少ないだろうと感じた。

## さいごに

国立国会図書館のウェブサイトでは、アジア情報研修の目的を以下のように紹介している。『アジア情報研修は、アジア資料・情報に携わる図書館員がアジアに関する情報資源について基礎的な

知識を習得し、業務の発展・充実に役立ててもらうとともに、アジア情報に関係する全国の図書館員が交流し、それぞれの抱える問題等を話し合う機会を提供することを目的としています。』<sup>(8)</sup>

これを読んで、アジア情報に携わる図書館員でないのに、そもそも図書館業務全般に対して未熟な筆者が、果たして研修内容についていけるのだろうか、受講前は不安に思っていた。だが、実際に受講してみると、講義資料は図書館員でなくても理解できるほど分かりやすいものであったし、講師の説明も非常に親切であった。上述したように、実習問題は事前に予習したうえで講義に臨むことができたし、アジア情報に携わる図書館員ばかりが受講しているわけではなさそうであった。

参加することができて本当によかったと思っている。研修で得たことは、今後の業務に必ず活かしていきたい。

レファレンス業務の課内研修を受け始めたのは、この研修を受講するちょうど1ヶ月ほど前のことであった。課内研修のプログラムは2ヶ月以上にわたって組まれており、きめ細やかな指導を受けることができた。

人員削減により、新人教育にまで手が回らない図書館が増えていると聞く。本学図書館とて潤沢なほど人員が確保されているとは言い難いだろう。そんな状況下でありながら、丁寧な指導を受けられた筆者は本当に幸せ者だと感じている。多忙にもかかわらず熱意をもってご指導くださったレファレンス業務担当はじめ諸先輩方には、この場を借りて心から御礼申し上げます。また、アジア情報研修参加に際しても、多大なご配慮いただきましたことに感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

## 注・参考資料

- (1) 過去開催したアジア情報研修  
<http://rnavi.ndl.go.jp/asia/entry/asia-workshop.php>
- (2) アジア情報室の前史  
<http://rnavi.ndl.go.jp/asia/entry/bulletin4-2-1.php>
- (3) 平成22年度アジア情報研修  
<http://rnavi.ndl.go.jp/asia/entry/asia-workshop22.php>
- (4) 上記(3)と同じ  
(平成22年度アジア情報研修講義資料①中国関係資料の調べ方概論・講義資料編)
- (5) アジア情報室所蔵資料の概要：コレクション：上海新

華書店旧蔵書

<http://rnavi.ndl.go.jp/asia/entry/asia-plan.php>

<http://rnavi.ndl.go.jp/asia/entry/shinka.php>

(8) アジア情報研修

(6) 国立国会図書館所蔵アジア関係資料の検索

<http://rnavi.ndl.go.jp/asia/entry/asia-workshop.php>

<http://rnavi.ndl.go.jp/asia/entry/asia-03serch.php>

(7) 来館利用：アジア情報室閲覧室配置図

(しらかみ ゆか 図書館事務室)